

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん ちやうこく ぶつぞうにゆうもん てんじ
平成知新館1F-1「彫刻」の「仏像入門」に展示されている作品について勉強してみよう。

ぶつぞう
仏像にはどんな種類があるの？

お正月やお盆にお寺へお参りをしたり、今日みたいに博物館で展示をみたりしていると、阿弥陀如来、観音菩薩、不動明王、毘沙門天など、むつかしい漢字の名前をしたたくさんのお仏さまに出会うことでしょう。あまりにもいろんなお仏さまがいるので、お仏さまの像＝仏像には、いったいどれだけたくさんの種類があるのだろう、と思ったみなさんも多いのではないのでしょうか。いろんな種類のお仏さまですが、じつは

- ① 如来
- ② 菩薩
- ③ 天
- ④ 明王

の4種類に大きく分けることができます。ただし偉いお坊さんの肖像彫刻のように、必ずしもこの4種類に入らないものもあります (⑤その他)。

① 如来

さとりを得た人、真理に到達した人という意味です。さとりを得ているので、からだを飾りたいといった欲望がなく、基本的には粗末な衣を身にまとっています。これには、釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来などがあります。ただし、太陽をお仏さまにした大日如来は、如来のなかでも別格であるため、菩薩と同じようににぎやかな飾りを体にまとっています。仏教はインドにおいて、お釈迦さまとしてよく知られる釈迦如来によってはじめられました。釈迦は今から2500年ほど前に活躍した実在の人でインドの王子でしたが、さとりを得てからはめざめた人＝ブツダ (仏陀) とよばれました。図1は仏像が初めてつくられた、パキスタンのガンダーラ地方でつくられたブツダの像です。

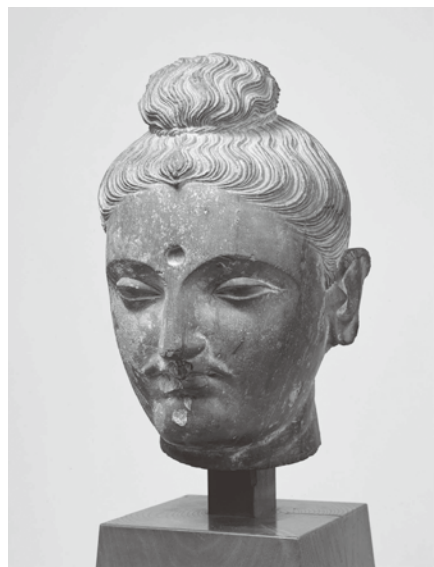


図1 石造如来頭部
パキスタン ガンダーラ(2~3世紀)
京都国立博物館蔵

② 菩薩

さとりを得るために修行中で、まだ完全にさとりを得ていないので、耳飾りや胸飾りなどの装身具をたくさん身につけています。弥勒はお釈迦さまのあとつぎとして56億7千万

年後にあらわれることになっていますが、それまでは菩薩として修行しています。その姿をあらわしているのが、頬に手をあててものを思う姿の像です。また、観音や地藏などは、さとりを得るための修行をしながらも、我々を救う役目をもっています。そのような役目からか、片方の足をふみ出して歩く姿にあらわされることも多いです。

③ 天

天とは、簡単にいうと神さまのことです。日本にもたくさんの神さまがおられるように、インドでも仏教が生まれるよりずっとむかしから、独自の神さまが信じられていました。それが仏教に取り入れられて、守り神となったものです。また、シルクロードを経て、中国、そして日本へと仏教が伝えられたときに、それぞれの場所であらたに現地の神々も守護神として取り入れられました。梵天や帝釈天はそれぞれブラフマー、インドラというインドの神さまでした。お正月などにおまつりする七福神に含まれている毘沙門さま、大黒さま、弁天さまも、もともとはインドの神さまです。

④ 明王

インドでむかしから信じられていたヒンドゥー教が、のちに仏教に取り入れられて発達したのが密教です。明王というのは密教特有の尊像です。ヒンドゥー教の神々の姿が取り入れられたので、多くの顔や腕を持っています。また、やさしい心だけでは救えない人々のために、不動明王をはじめ、その多くが怒った表情をしています。図2は愛染明王という仏さまで、愛の力をさとりにかえるという力を持っています。現在のわれわれも、なぜか愛という赤い色を想像しますが、この愛染明王ももとは全身赤い姿をしていました。6本の腕を持ち、そのうちの2本に弓と矢を持っています。東洋のキューピッドともいわれますが、キューピッドにくらべると、こちらは表情がおそろしげです。



図2 木造愛染明王坐像 平安時代(12世紀) 京都国立博物館蔵

⑤ その他

上の4つ以外に、聖徳太子や弘法大師空海などの肖像彫刻などもあります。ただし、肖像彫刻も単に過去の偉大な人の姿をあらわしているというだけではなく、守護神としての役目を担っている場合もあります。

無数にあるようにおもわれる仏像も、このように分類してみるとわかりやすいですね。また、手の形や表情などにもすべて意味がありますので、そのようなところにも注目してみてみましょう。

(美術室・浅湫 毅)